

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2007 ～ 2009  
 課題番号：19730411  
 研究課題名（和文）  
 中学生の問題行動の動機に関する学級集団心理学的研究  
 研究課題名（英文）  
 The Relationship between Problem Behavior and its Vocabularies of Motive in Junior High School Students  
 研究代表者  
 大久保 智生（OKUBO TOMOO）  
 香川大学・教育学部・准教授・  
 研究者番号：30432777

## 研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、中学生がどのように問題行動を正当化しているのかを明らかにし、問題行動やそれを支える学級内の文化に対して教師がどのような関わりを行っていくべきなのかを検討することであった。研究を行った結果、中学生の問題行動を正当化する動機の語彙が明らかになり、これらは説明する対象によって使い分けられ、学級集団によって用いられる動機の語彙が異なること、また、そこには教師との関係が影響していることが明らかになった。

## 研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to examine the relationship between problem behavior and its vocabularies of motive in junior high school students. Results showed that problem behavior was related to its vocabularies of motive in junior high school students, and more vocabularies of motive were used in classroom with high levels of problem behavior.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	0	600,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	330,000	2,030,000

研究分野：学級集団心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：問題行動、動機の語彙、中学生、学級集団

## 1. 研究開始当初の背景

近年、非行やいじめなどの様々な問題行動の継続化が問題となり、問題行動を正当化する動機に関心が集まっている。例えば、森田・清水（1994）はいじめを正当化するメカニズムとして Sykes & Matza（1957）の「責

任の否定」「加害の否定」「被害者の否定」「非難者への非難」「高度の忠誠への訴え」という5つの中和化の技術を挙げ、いじめの動機についての検討を行っている。

問題行動を正当化する動機とは、実際の行動を導く動機というよりも、その行動を行った理由（動機）を事後的に説明するための方

略であり、これらは動機の語彙 (Mills, 1940) としてとらえられる。こうした動機の語彙の特徴としては、他者に認められなければ動機たりえないということが挙げられる。例えば、中和化の技術は動機の語彙として他者に認められるからこそ、問題行動を正当化することができるのである。こうした視点から行った大久保らの研究 (大久保・加藤, 2006a) では、他の要因と比べて問題行動を正当化する動機の語彙が問題行動の規定要因となっていることを明らかにし、また、荒れている学級と落ち着いている学級では問題行動を正当化する動機の語彙がより多く用いられていることが明らかになっている。

このように、動機の語彙は、中和化の技術の観点から検討されてきたが、これは理論的に導き出されたものであり、現実には他の動機の語彙のほうが用いられている可能性もあり、また、決して網羅的なものではない (森田・清水, 1994)。したがって、中学生が実際に問題行動を正当化するのにどのような動機の語彙を用いているのかを検討する必要があるといえる。

また、前述の大久保らの研究から明らかのように、動機の語彙は、その個人の属している社会や集団によって異なるのである。したがって、学校適応の問題といえる問題行動を考えた場合、仲間に認められる動機を表明することで生徒は行動を正当化し、自らの罪悪感を軽減していると考えられる。このように考えると、仲間や大人など問題行動の動機を表明する対象が異なれば、表明する動機も異なると考えられることから、動機を表明する対象による動機の語彙の用いられ方の違いについて検討する必要があるといえる。

加えて、中学生を対象としたこれまでの申請者の研究 (加藤・大久保, 2002, 2004, 2005, 2006; 大久保・青柳, 2003; 大久保・加藤, 2006b) から、荒れている学級・学校では問題行動は適応行動であり、それを支持する生徒文化があることが明らかになっているが、荒れている学級・学校ではこうした生徒文化の影響を受けて、生徒たちは問題行動を正当化する動機の語彙を学習していることが推察される。したがって、中和化の技術に焦点を当てて、荒れている学級と落ち着いている学級において動機の語彙が異なることを明らかにした申請者らの研究 (大久保・加藤, 2006a) と同様の結果が得られるのか検討する必要があるといえる。

そして、こうした生徒文化の形成には教師の指導のあり方が強く影響していることが申請者らの研究 (加藤・大久保, 2004) から明らかになっている。また、生徒文化は雰囲気に近い概念であるが、学級の雰囲気の形成に教師が強く影響を与えていることは近藤 (1994) の研究などからも明らかである。何

よりも学級経営の面からも問題行動やそれを支える文化に対してどのような関わり方が有効かを検討することは重要であるといえる。したがって、教師の関わり方が学級で用いられる動機の語彙にどのような影響を与えているのかを検討する必要があるといえる。

## 2. 研究の目的

以上を踏まえ、本研究では、中学生を対象として実際に問題行動の正当化に用いられている動機の語彙を明らかにした上で、説明対象によって問題行動の動機の表明がどのように変わるのか、荒れている学級と落ち着いている学級では動機の語彙がどのように用いられているのか、問題行動を正当化する動機の語彙は教師の関わり方によってどのように変化するかを4つを検討することを目的とする。具体的には、科学研究費の交付期間内に、以下の4つの点を明らかにすることを目的とする。

(1) 中学生は実際にどのような問題行動を正当化する動機の語彙を用いているのか (研究1):

これまで申請者が行ってきた研究では、問題行動を正当化する動機の語彙について Sykes & Matza (1957) の「責任の否定」「加害の否定」「被害者の否定」「非難者への非難」「高度の忠誠への訴え」という5つの中和化の技術をもとに、質問項目を作成し、検討してきた。しかし、この5つの中和化以外のさまざまな動機の語彙についても学級集団の中で中学生が学習していることも考えられる。そこで研究1では、中学生が学級集団の中で実際にどのような動機の語彙を用いて問題行動を正当化しているのかを検討する。

(2) 中学生は問題行動の動機を対象によってどのように表明し、使い分けているのか (研究2):

問題行動を正当化する動機の語彙は、動機の説明をする対象に受け入れられるように表明し、使い分けていると考えられる。そこで研究2では、友人、教師、親などの対象によって問題行動の動機をどのように表明し、使い分けているのかを検討する。また、この動機の表明の仕方と実際の問題行動との関連も検討する。

(3) 荒れている学級では動機の語彙がどのように用いられているのか (研究3):

中和化の技術に焦点を当てた申請者らの研究 (大久保・加藤, 2006a) では、中和化の技術に焦点を当てて、荒れている学級と落ち着いている学級において動機の語彙が異

なることを明らかにした。そこで研究3では、中和化だけではなく、他の動機の語彙においても先行研究と同様に荒れている学級のほうがより多く用いられているのかを検討する。

(4) 問題行動を正当化する動機の語彙は教師の指導によってどのように変化するのか(研究4)：

学校や学級経営の面から問題行動やそれを支える文化に対して、教師のどのような関わりが有効かを検討することは重要であるといえる。そこで研究4では、教師の関わり方が学級で用いられる動機の語彙にどのような影響を与えているのかを検討する。

### 3. 研究の方法

(1) 2007年度の研究(研究1)の方法：

研究1では質問紙を用いて、まず、中学生を対象に問題行動を起こした際にどのような正当化を行ったのかという動機の語彙の自由記述を収集した。それだけでなく、問題行動をしたことのある中学生に対して、問題行動をしたときにどのように正当化して動機を仲間や大人に伝えたかなどを詳細にインタビューした。

加えて、大学生を対象に、中学生のころを回想してもらい、問題行動を起こした際にどのような正当化を行ったのかという動機の語彙の自由記述を収集した。

収集された自由記述およびインタビューデータの結果とこれまでの研究(大久保・加藤, 2006a)で用いた項目を参考にして、新しい動機の語彙に関する尺度を作成した。

また、自由記述の結果についてはカテゴリー化して質的に検討した。

(2) 2008年度の研究(研究2)の方法：

研究2では、質問紙を用いて、様々な問題行動を起こしてしまった状況を示した仮想場面を作成して調査を行った。

仮想場面について、友人、教師、親に対して中学生がどのような動機で説明するかを検討した。具体的には、問題行動場面ごとに、友人、教師、親などの動機を説明する対象に対して、研究1で作成した動機の語彙による説明を中学生がどのくらい用いるかを尋ねて、検討した。

なお、仮想場面を作成する際に、大久保・青柳・松岡・黒沢(2000)の研究を参考にした。

(3) 2009年度の研究(研究3、4)の方法：

研究3、4では、同時に質問紙を用いて調査を行った。

まず、当該の学校の教師および当該の学級担任の教師などにインタビューを行い、学級の荒れ尺度の結果だけではなく、多面的に学級の荒れについて評価し、分類した。

次に、問題行動の経験と問題行動の動機の語彙、生徒文化、規範意識を測定し、教師との関係も測定した。具体的に、問題行動の経験については、大久保・加藤(2006)の尺度を用いた。動機の語彙については、研究1で作成した尺度を用いた。生徒文化については、加藤・大久保(2002)の尺度を用いた。規範意識については、大久保・川田・加藤(投稿中)を参考に作成した尺度を用いた。教師との関係については大久保・青柳(2004)の尺度を用いた。

### 4. 研究成果

(1) 2007年度の成果：

研究1では、中学生は実際に問題行動を正当化する動機の語彙をどのように用いているのかを検討した。

まず、中学生が問題行動に対して実際にどのような正当化を行っているのか、その語彙について自由記述による調査を行い、データを収集した。加えて、大学生を対象に、中学生のころを回想してもらい、問題行動を起こした際にどのような正当化を行ったのか、その語彙についても自由記述による調査を行い、データを収集した。その結果、これらの調査で収集された自由記述の結果とこれまでの研究(大久保・加藤, 2006)で用いた項目を参考にして、新しい動機の語彙に関する尺度を作成した。

また、自由記述の結果についてはカテゴリー化を行い、問題行動の経験によって異なるのかについて質的に検討した。その結果、問題行動をしたことがある者となない者では動機の語彙が異なっていた。

以上のように、中学生が問題行動を正当化するためにどのような動機の語彙を用いているのかを多面的に検討した。

(2) 2008年度の成果：

研究2では、中学生は問題行動の動機を対象(教師や友人)によってどのように表明し、使い分けしているのかを検討した。

様々な問題行動を起こしてしまった状況を示した仮想場面を作成し、それについて、友人、教師、親に対してどのように動機を説明するかを検討した。具体的には、問題行動場面ごとに、友人、教師、親などの動機を説明する対象に対して、作成した動機の語彙による説明をどのくらい用いるかを尋ねて、検討した。

その結果、大久保・青柳・松岡・黒澤(2000)の研究と同様に動機の語彙を相手によって

うまく使い分けていることが明らかとなった。つまり、青年は他者に認められるような動機による説明を状況にあった形で表明していることが明らかとなった。

以上のように、問題行動を正当化するために、自分自身がどう思っているかは別として、他者から承認されやすい動機を表明していることが示された。

### (3) 2009年度の成果：

研究3では、荒れている学校や学級ではどのような動機の語彙が用いられているのかを検討した。同時に、研究4では、問題行動を正当化する動機の語彙は教師の関わりによってどのように変化するかを検討した。

具体的には、研究3と4では荒れている学級と落ち着いている学級の生徒が用いている動機の語彙を比較し、それと教師との関係について検討した。

まず、大久保・加藤(2006)の先行研究と同様に学級の荒れを測定して荒れている学級と落ち着いている学級に分類した。その際、教師のインタビューなども参考に荒れている学級と落ち着いている学級の分類を行った。

次に、問題行動の経験と問題行動の動機の語彙、生徒文化、規範意識を測定し、荒れている学級と落ち着いている学級とでこれらの比較を行った。

その結果、荒れている学級と落ち着いている学級では、生徒文化や規範意識が異なっており、用いられる動機の語彙も異なっていた。以上の研究の結果から、中学生が学級集団の中で、生徒文化の影響から動機の語彙を用いて問題行動を正当化していることが明らかになった。

また、問題行動を正当化する動機の語彙と教師との関係に関連がみられた。教師の関わり方によって、問題行動を正当化する動機の語彙も変化することが明らかとなった。

### (4) 研究全体の成果：

本研究の目的は、中学生がどのように問題行動を正当化しているのかを明らかにし、問題行動やそれを支える学級内の文化に対して教師がどのような関わりを行っていくべきなのかを検討することであった。研究を行った結果、中学生の問題行動を正当化する動機の語彙が明らかになり、これらは説明する対象によって使い分けられ、学級集団によって用いられる動機の語彙が異なること、またそこには教師との関係が影響していることが明らかになった。

以上のような研究成果は、実践に対して次のような示唆をもつと思われる。本研究では、問題行動をする生徒個人やその環境に単に

問題があるというわけではなく、問題行動を正当化する動機を集団の中で学習していることが問題行動を引き起こす引き金となっている可能性が示唆された。この結果から考えられることは、援助や介入を考える際、学級集団、特に問題行動をする生徒と他の生徒との関係に注目する必要があるということである。加藤・大久保(2004)が実証的に示しているように、最近では、問題行動に対して、「受容」や「共感」をベースにしたカウンセリングの技法が使用されることが多いが、多くの場合、教師の努力にも関わらず、指導すればするほど問題行動はエスカレートしていく。つまり、問題行動をする生徒を中心とした指導だけでは不十分であり、学級集団に所属する他の生徒への配慮と関わりが必要といえる(加藤・大久保, 2004)。したがって、問題行動を起こす生徒に対して、様々な介入プログラムを行うだけでなく、教師が学級集団に対してどのような関わり方でどのような文化を形成していくのかが重要になるといえる。

## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計4件)

①大久保智生、関係論に基づく中学生の問題への対応の検討、日本教育心理学会第51回総会、2009年9月20日、静岡大学

②大久保智生、中学生の問題行動と学校適応、日本教育心理学会第51回総会、2009年9月20日、静岡大学

③大久保智生、どのように動機は構成されるのか? : 発生と継続に注目した自由記述の分析から、日本発達心理学会第20回大会、2009年3月24日、日本女子大学

④大久保智生、問題児を見る視点の変更: 「できない子」から「あえてしない子」へ、International Society for Cultural and Activity Research (ISCAR) 第1回国際アジア大会、2007年9月7日、武蔵工業大学

〔図書〕(計1件)

①大久保智生、ナカニシヤ出版、都筑学(編) やさしい発達心理学、第14章 動機の語彙が増える青年期、2008年、217-231。

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

大久保 智生 (OKUBO TOMOO)

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：30432777